いしのとう

石之塔遺跡

縄文時代のまじない

石之塔遺跡

石之塔遺跡は、太田市藪塚町（旧新田郡藪塚本町）にあり、東の八王子丘陵と西の大間々扇状地に挟まれた水田地帯中の微高地上に立地します。現在、圃場整備により平坦な地形となりましたが、かつてこの地に「大清水」と呼ばれる湧水が存在し、南南東方向へ伸びる谷地形を形成していました。その東岸の微高地上に縄文時代遺跡の集中が確認されています。またこの遺跡の南500メートルには、縄文時代の敷石住居跡（中期）が確認された中原遺跡があります。（敷石住居跡は移動し保存してあります。）

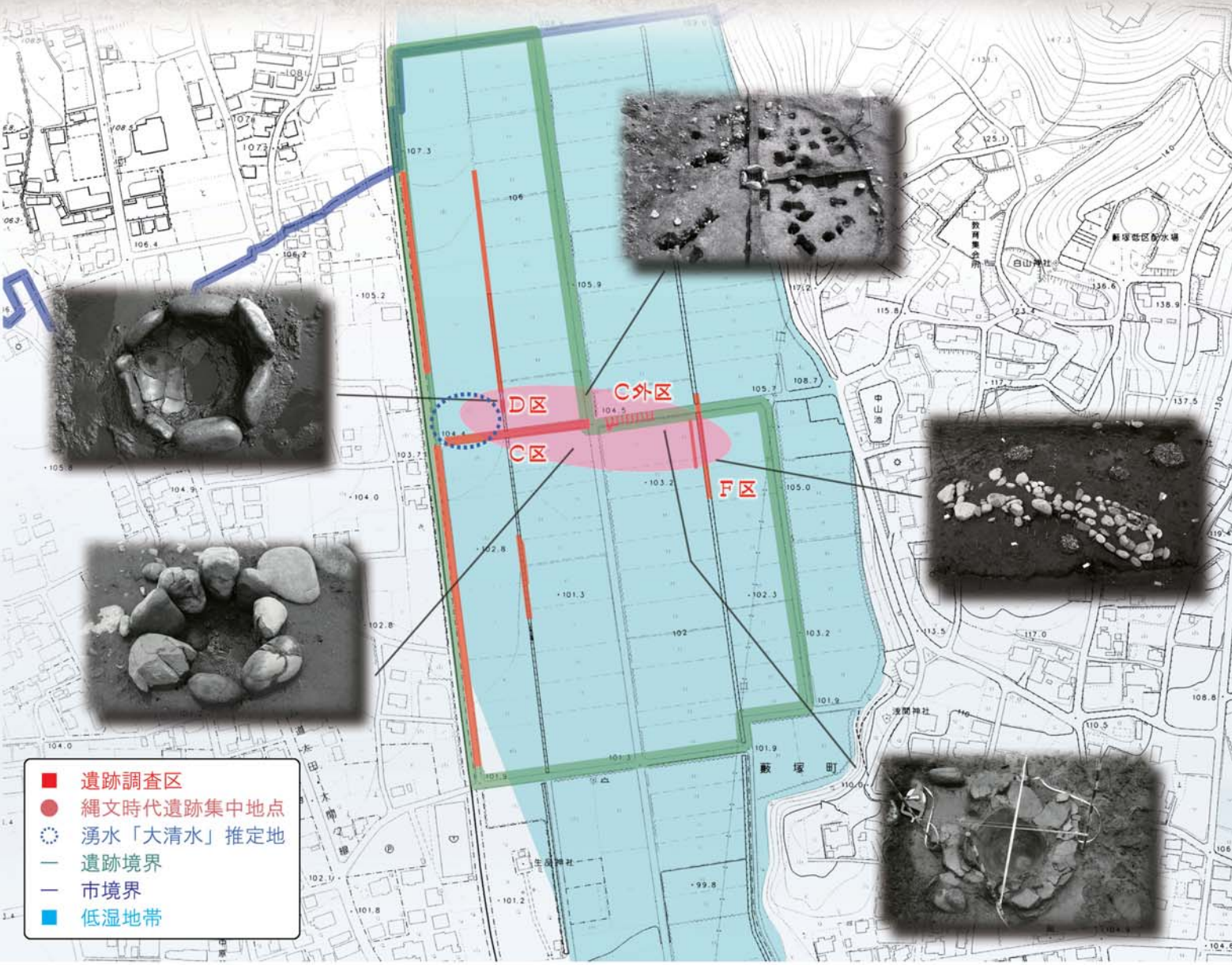
石之塔遺跡の発掘調査は、1986年に土地改良事業に伴って藪塚本町（当時）教育委員会により行われました。東西120メートル、南北100メートルほどの範囲に広がる縄文時代後・晩期から平安時代にかけての遺跡です。

縄文時代の土器は、後期前半（今から約4000～3500年前）も出土していますが、主体は晩期（今から約3000年～2400年前）です。

遺構としては、配石遺構、敷石状遺構、炉状遺構なども見つかっており、これらの遺構の多くは住居の一部と考えられます。

遺物では、土製耳飾100、石製玉類30、岩版７、土版８、石棒７、土偶20などの特徴的な遺物のほか、多数の石鏃、石錘、土錘、石斧、石錐などが出土しています。土製耳飾は、国重要文化財の指定を受けた桐生市千網谷戸遺跡出土の耳飾に酷似しています。なおこの遺跡内の極めて狭い範囲から高温で焼かれた多量のイノシシの下顎の骨が出土してます。

石之塔遺跡は、縄文晩期の特徴をよくあらわした遺跡ということができます。出土遺物はその重要性から太田市重要文化財に指定されており、藪塚本町歴史民俗資料館で展示または太田市教育委員会に保管されています。



主な調査区の状況

（縄文時代遺跡の集中する地点）

C調査区

石棒（せきぼう）や土偶（どぐう）を含む多くの縄文時代の遺物や炉（ろ）が発見されました。

C外調査区

石製玉類（せきせいたまるい）や土版（どはん）を含む多くの遺物や埋甕炉（まいようろ）などが発見されました。

F調査区

敷石住居（しきいしじゅうきょ）の一部や多数の土器片が発見されました。

D調査区

透彫付土製耳飾（すかしぼりつきどせいみみかざり）や岩版（がんばん）を含む多くの遺物や炉が発見されました。

F調査区で発見された後期の敷石住居の一部

C調査区北で発見された石囲炉（いしがこいろ）をもつ晩期の住居

D調査区の岩版出土状況

C外調査区で発見された埋甕炉

美へのあこがれ

縄文時代後・晩期には「装身具（身体を飾る道具）」が発達します。

呪術的な使用も考えられますが、いつの時代でも「美しいもの」や「美しいものを身に付けたい」という「あこがれ」が存在したのではないでしょうか。

透彫付土製耳飾

【土製耳飾 どせいみみかざり】

粘土を焼いてつくられた、縄文時代の耳飾りです。ピアスのように「耳たぶ」に穴をあけて、そこにはめ込み使われました。中には赤色顔料で彩色されているものもあり、儀礼的な使用も考えられています。

石之塔遺跡からは、細いものは小指ほどのものから10㎝を超える大きいものまで、100個体（完形・破片）出土しています。

土製耳飾

横から見た土製耳飾。耳たぶにかかりやすいように中央がくぼんでいます。

【石製玉類 せきせいたまるい】

小さく平らな石に孔が開けられています。首飾りとして使用されたと考えられます。

石製玉類の使用例

まじないの石

縄文時代、特に後・晩期には呪術や儀礼で使われたと思われる様々な石製品が現れます。当時の人々が石に込めた思いをご想像ください。

【岩版 がんばん】

縄文時代の護符（お守り）と考えられている板状の石製品です。縄文時代晩期に東北と関東に分布し、三叉文や渦巻文などの文様が描かれることが特徴です。

岩版は東北地方で出現したものであり、当時もこの地方において東北地方との交流があったのでしょう。

【土版 どばん】

石製品ではありませんが、「岩版」を模倣したものと考えられており、同じく護符と考えられています。

【石棒 せきぼう】

威儀具や儀礼の道具と考えられており、縄文時代中期以降に分布がみられます。なかには２ｍを超える巨大なものもあります。

【独鈷石 どっこいし】

縄文時代の磨製石器の一種で、後期以降に東日本を中心に分布がみられます。仏具の独鈷の形に似ているため、この名前がついています。大形品については儀礼的な用具と考えられています。

祈りの土製品

石製品と同様に呪術や儀礼で使われたと思われる様々な土製品が出土します。当時はどのような祈りや祭が行われたのでしょうか。

砕かれて出土する土偶

土偶（上画像の左上）の頭頂部表現。当時の人はこのような髪型だったのでしょうか。

【土偶 どぐう】

人の形を表現した縄文時代の土製品です。中期以降、盛んに作られます。基本的に女性を表現しています。多くが打ち欠かれて出土することが特徴です。安産祈願や病等の身代わりとして使用されたと考えられています。

【異形土器 いけいどき】

器の形からその土器の使い方が推測しにくい土器のことです。儀礼に使用されたものでしょうか。

左画像の上段左は高台付浅鉢の高台部分で、上段中央および下段左は香炉形土器とも呼ばれる土器の上部です。

上からみた異形土器（左画像の右下のもの）

ミニチュア土器と一般的な土器の大きさ比較

【ミニチュア土器 みにちゅあどき】

非常に小さい土器です。通常の大きさの土器を模倣したものが多いですが、その小ささから器としての機能はありません。東日本の縄文晩期に多く作られます。祭的なものに使われたと考えられています。

生活のアイテム

縄文時代の人々は生活するにあたり様々な道具を使用してきました。縄文人の精神世界を支えた、それら遺物の数々をご覧ください。

【各種縄文土器 かくしゅじょうもんどき】

縄文土器は、深鉢が基本であり、特に晩期において様々な形の土器が作られるようになります。用途としては主に「煮炊き・貯蔵・盛付け」が考えられており、深鉢は主に煮炊きの道具で、浅鉢は盛付けの道具であると考えられています。

【注口土器 ちゅうこうどき】

管状の注ぎ口がある土器です。お酒などを注ぐための土器です。

【赤彩土器 せきさいどき】

赤色顔料で部分的に彩色された浅鉢です。赤彩は浅鉢などの食物を盛る器に付ける例が多いです。

【石鏃 せきぞく】

矢の先端に装着される石製の狩猟具です。イノシシやシカなどを狩猟する時に使用されました。

【石錘 せきすい】

網に使用される石製の錘です。切目や溝に糸を巻きつけて使用したと考えられています。

現在、周辺に大きな川はありませんが、当時は存在したようです。

【磨製石斧 ませいせきふと 打製石斧 だせいせきふ】

磨製石斧（左２点）は樹木の伐採用具、打製石斧（右２点）は土掘り用具と考えられています。

【石錐 せきすい】

穴を開けるための石製の錐であると考えられています。

【石皿 いしざらと磨石 すりいし】

ドングリなどの堅果類をすり潰し、粉にする道具と考えられています。

【獣骨 じゅうこつ】

極めて狭い範囲から多量の獣骨が出土しました。全て焼かれており、イノシシが圧倒的に多く39頭、シカは数頭でした。

出土したイノシシ骨の部位のほとんどが下顎の骨である点が特徴です。

縄文時代後・晩期においてイノシシの下顎骨を焼くという狩猟儀礼があったのではないでしょうか。同時期の関東甲信越地方においてイノシシ・シカを中心とする骨を焼く例がみられます。

【大清水 おおしみず】

右画像は、江戸時代の初めのころに描かれた絵図です。縄文時代後・晩期と江戸時代の初めでは2000年以上の差があり、同じ地形であったとは言えませんが、似た地形であった可能性はあります。

絵図には、縄文時代の遺物が集中するC・D調査区にあたる箇所において沼地が描かれ「大清水」という地名が記されています。確かにC・D区は調査に支障が出るほど湧水の多い場所でした。

縄文時代後・晩期、後に「大清水」と呼ばれる湧水のほとりに人々が暮らし祈り、様々な遺物を残したのではないでしょうか。

「藪塚村絵図（近世初期）」部分
（『藪塚本町誌』上巻付図から転載）

ご覧いただいたように石之塔遺跡からは、「縄文時代のまじない」を裏付ける様々な遺物が出土しました。そしてそれぞれの遺物には、それぞれ異なる役割があったのでしょう。縄文時代の人々の様々な不安や畏れ。それに対する祈りや儀式。今も昔も人々の心の動きは変わりません。石之塔遺跡の遺物は、遥かなときを越え、込められた思いを今に伝えます。

太田市教育委員会　文化財課
〒370-0495　群馬県太田市粕川町520
TEL.0276-20-7090　FAX.0276-52-6080
印刷　平成22年３月